雪霊記事

泉鏡花

一

「このくらいな事が……何の……小児(こども)のうち歌留多(かるた)を取りに行ったと思えば――」

越前(えちぜん)の府、武生(たけふ)の、侘(わび)しい旅宿(やど)の、雪に埋れた軒を離れて、二町ばかりも進んだ時、吹雪に行悩みながら、私は――そう思いました。

思いつつ推切(おしき)って行(ゆ)くのであります。

私はここから四十里余り隔たった、おなじ雪深い国に生れたので、こうした夜道を、十町や十五町歩行(ある)くのは何でもないと思ったのであります。

が、その凄じさといったら、まるで真白な、冷い、粉の大波を泳ぐようで、風は荒海に斉しく、ごうごうと呻って、地——と云っても五六尺積った雪を、押揺って狂うのです。

「あの時分は、脇の下に羽でも生えていたんだろう。きっとそうに違いない。身軽に雪の上へ乗って飛べるように。」

……でなくっては、と呼吸も吐けない中で思いました。

九歳十歳ばかりのその小児は、雪下駄、竹草履、それは雪の凍てた時、こんな晩には、柄にもない高足駄

さえ穿(は)いていたのに、転びもしないで、しかも遊びに更けた正月の夜(よ)の十二時過ぎなど、近所の友だちにも別れると、ただ一人で、白い社(やしろ)の広い境内も抜ければ、邸町(やしきまち)の白い長い土塀も通る。……ザザッ、ごうと鳴って、川波、山颪(やまおろし)とともに吹いて来ると、ぐるぐると廻る車輪のごとき濃く黒ずんだ雪の渦に、くるくると舞いながら、ふわふわと済まアして内へ帰った――夢ではない。が、あれは雪に霊があって、小児を可愛(いとし)がって、連れて帰ったのであろうも知れない。

「ああ、酷(ひど)いぞ。」

ハッと呼吸(いき)を引く。目口に吹込む粉雪(こゆき)に、ばッと背

を向けて、そのたびに、風と反対の方へ真俯向(まうつむ)けになって防ぐのであります。こういう時は、その粉雪を、地(じ)ぐるみ煽立(あおりた)てますので、下からも吹上げ、左右からも吹捲(ふきま)くって、よく言うことですけれども、面(おもて)の向けようがないのです。

　小児の足駄を思い出した頃は、実はもう穿(はき)ものなんぞ、疾(とう)の以前になかったのです。

　しかし、御安心下さい。——雪の中を跣足(はだし)で歩行(ある)く事は、都会の坊ちゃんや嬢さんが吃驚(びっくり)なさるような、冷いものでないだけは取柄です。ズボリと踏込んだ一息の間は、冷(つめた)さ骨髄に徹するのですが、勢(いきおい)よく歩行(ある)

いているうちには温くなります、ほかほかするくらいです。

　やがて、六七町潜って出ました。まだこの間は気丈夫でありました。町の中（うち）ですから両側に家が続いております。この辺は水の綺麗（きれい）な処で、軒下の両側を、清い波を打った小川が流れています。もっともそれなんぞ見えるような容易（やさし）い積り方じゃありません。

　御存じの方は、武生と言えば、ああ、水のきれいな処かと言われます――この水が鐘を鍛えるのに適するそうで、釜（かま）、鍋（なべ）、庖丁、一切の名産――その昔は、聞

えた刀鍛冶(かたなかじ)も住みました。今も鍛冶屋が軒を並べて、その中に、柳とともに目立つのは旅館であります。が、もう目貫(めぬき)の町は過ぎた、次第に場末、町端(まちはず)れの——と言うとすぐに大(おおき)な山、嶮(けわし)い坂になります——あたりで。……この町を離れて、鎮守の宮を抜けますと、いま行(ゆ)こうとする、志す処へ着く筈(はず)なのです。

それは、——そこは——自分の口から申兼ねる次第でありますけれども、私の大恩人——いいえ恩人で、そして、夢にも忘れられない美しい人の侘住居(わびずまい)なのであります。

侘住居と申します——以前は、北国(ほっこく)においても、旅

館の設備においては、第一と世に知られたこの武生の中（うち）でも、その随一の旅館の娘で、二十六の年に、その頃の近国の知事の妾（おもいもの）になりました……妾（めかけ）とこそ言え、情深（なさけぶか）く、優（やさし）いのを、昔（いにしえ）の国主の貴婦人、簾中（れんちゅう）のように称（たた）えられたのが名にしおう中の河内（かわち）の山裾（やますそ）なる虎杖（いたどり）の里に、寂しく山家住居（やまがずまい）をしているのですから。

この大雪の中に。

二

流るる水とともに、武生は女のうつくしい処だと、

昔から人が言うのであります。就中《なかんずく》、蔦屋《つたや》――その旅館の――お米《よね》さん（恩人の名です）と言えば、国々評判なのでありました。

まだ汽車の通じない時分の事。……

「昨夜はどちらでお泊り。」

「武生でございます。」

「蔦屋ですな、綺麗《きれい》な娘さんが居ます。勿論、御覧でしょう。」

旅は道連《みちづれ》が、立場《たてば》でも、また並木でも、言《ことば》を掛合う中《うち》には、きっとこの事がなければ納まらなかったほどであったのです。

往来（ゆきき）に馴（な）れて、幾度（いくたび）も蔦屋の客となって、心得顔をしたものは、お米さんの事を渾名（あだな）して、むつの花、むつの花、と言いました。——色と言い、また雪の越路（こしじ）の雪ほどに、世に知られたと申す意味ではないので——これは後言（くりごと）であったのです。……不具（かたわ）だと言うのです。六本指、手の小指が左に二つあると、見て来たような噂（うわさ）をしました。なぜか、——地方（いなか）は分けて結婚期が早いのに——二十六七まで縁に着かないでいたからです。

（しかし、……やがて知事の妾（おもいもの）になった事は前にちょっと申しました。）

私はよく知っています——六本指なぞと、気(け)もない事です。確(たしか)に見ました。しかもその雪なす指は、摩耶夫人(まやぶにん)が召す白い細い花の手袋のように、正に五弁で、それが九死一生だった私の額に密(そっ)と乗り、軽く胸に掛(かか)ったのを、運命の星を算(かぞ)えるごとく熟(じっ)と視(み)たのでありますから。——

またその手で、硝子杯(コップ)の白雪に、鶏卵(たまご)の蛋黄(きみ)を溶かしたのを、甘露を灌(そそ)ぐように飲まされました。

ために私は蘇返(よみがえ)りました。

「冷水(おひや)を下さい。」

もう、それが末期(まつご)だと思って、水を飲んだ時だった

のです。

脚気（かっけ）を煩って、衝心をしかけていたのです。そのために東京から故郷（くに）に帰る途中だったのでありますが、汚れくさった白絣（しろがすり）を一枚きて、頭陀袋（ずだぶくろ）のような革鞄（かばん）一つ掛けたのを、玄関さきで断られる処を、泊めてくれたのも、蛍と紫陽花（あじさい）が見透（みとお）しの背戸に涼んでいた、そのお米さんの振向いた瞳（め）の情（なさけ）だったのです。

水と言えば、せいぜい米の磨汁（とぎしる）でもくれそうな処を、白雪に蛋黄（きみ）の情（なさけ）。――萌黄（もえぎ）の蚊帳（かや）、紅（べに）の麻、……蚊の酷（ひど）い処ですが、お米さんの出入りには、はらはらと蛍が添って、手を映し、指環（ゆびわ）を映し、胸の乳房を透（すか）して、

浴衣の染の秋草は、女郎花（おみなえし）を黄に、萩を紫に、色あるまでに、蚊帳へ影を宿しました。

「まあ、汗びっしょり。」

と汚い病苦の冷汗に……そよそよと風を恵まれた、浅葱色（あさぎいろ）の水団扇（みずうちわ）に、幽（かす）かに月が映（さ）しました。……

大恩と申すはこれなのです。——

おなじ年、冬のはじめ、霜に緋葉（もみじ）の散る道を、爽（さわや）かに故郷から引返（ひっかえ）して、再び上京したのでありますが、福井までには及びません、私の故郷からはそれから七里さきの、丸岡の建場（たてば）に俥（くるま）が休んだ時立合せた上下の旅客の口々から、もうお米さんの風説（うわさ）を聞きました。

知事の妾（おもいもの）となって、家を出たのは、その秋だったのでありました。

ここはお察しを願います。——心易くは礼手紙、ただ音信（おとずれ）さえ出来ますまい。

十六七年を過ぎました。——唯今（ただいま）の鯖江（さばえ）、鯖波（さばなみ）、今庄（いまじょう）の駅が、例の音に聞えた、中の河内、木の芽峠、湯の尾峠を、前後左右に、高く深く貫くのでありまして、汽車は雲の上を馳（はし）ります。

間（あい）の宿（しゅく）で、世事の用はいささかもなかったのでありますが、可懐（なつかしさ）の余り、途中で武生へ立寄りました。

内証で……何となく顔を見られますようで、ですか

ら内証で、その蔦屋へ参りました。
皐月（さつき）上旬でありました。

三

門（かど）、背戸の清き流（ながれ）、軒に高き二本柳（ふたもとやなぎ）、――その青柳（あおやぎ）の葉の繁茂（しげり）――ここに彳（たたず）み、あの背戸に団扇（うちわ）を持った、その姿が思われます。それは昔のままだったが、一棟（ひとむね）、西洋館が別に立ち、帳場も卓子（テエブル）を置いた受附になって、蔦屋の様子はかわっていました。
代替りになったのです。――

少しばかり、女中に心づけも出来ましたので、それとなく、お米さんの消息を聞きますと、蔦屋も蔦竜館(ちょうりゅうかん)となった発展で、持(もち)のこの女中などは、京の津から来ているのだそうで、少しも恩人の事を知りません。

番頭を呼んでもらって訊(たず)ねますと、――勿論その頃の男ではなかったが――これはよく知っていました。蔦屋は、若主人――お米さんの兄――が相場にかかって退転をしたそうです。お米さんにまけない美人をと言って、若主人は、祇園(ぎおん)の芸妓(げいしゃ)をひかして女房にしていたそうでありますが、それも亡くなりました。

知事——その三年前(ぜん)に亡くなった事は、私も新聞で知っていたのです——そのいくらか手当が残ったのだろうと思われます。当時は町を離れた虎杖(いたどり)の里に、兄妹がくらして、若主人の方は、町中のある会社へ勤めていると、この由、番頭が話してくれました。一昨年の事なのです。

——いま私は、可恐(おそろし)い吹雪の中を、そこへ志しているのであります——

が、さて、一昨年のその時は、翌日、半日、いや、午後三時頃まで、用もないのに、女中たちの蔭で怪(あやし)む気勢(けはい)のするのが思い取られるまで、腕組が、肘枕(ひじまくら)で、

やがて夜具を引被(ひっかぶ)ってまで且つ思い、且つ悩み、幾度(いくたび)か逡巡(しゅんじゅん)した最後に、旅館をふらふらとなって、とうとう恩人を訪ねに出ました。

わざと途中、余所(よそ)で聞いて、虎杖村に憧憬(あこが)れ行(ゆ)く。

……

道は鎮守がめあてでした。

白い、静(しずか)な、曇った日に、山吹も色が浅い、小流(こながれ)に、苔蒸(こけむ)した石の橋が架(かか)って、その奥に大きくはありませんが深く神寂(かんさ)びた社(やしろ)があって、大木の杉がすらすらと杉なりに並んでいます。入口の石の鳥居の左に、とりわけ暗く聳(そび)えた杉の下(もと)に、形はつい通りでありますす

が、雪難之碑と刻んだ、一基の石碑が見えました。

雪の難——荷担夫(にかつぎふ)、郵便配達の人たち、その昔は数多(あまた)の旅客も——これからさしかかって越えようとする峠路(とうげみち)で、しばしば命を殞(おと)したのでありますから、いずれその霊を祭ったのであろう、と大空の雲、重(かさな)る山、続く巓(いただき)、聳(そび)ゆる峰を見るにつけて、凄(すさま)じき大濤(おおなみ)の雪の風情を思いながら、旅の心も身に沁(し)みて通過ぎました。

畷道(なわてみち)少しばかり、菜種の畦(あぜ)を入った処に、志す庵(いおり)が見えました。侘(わび)しい一軒家の平屋ですが、門(かど)のかかりに何となく、むかしの状(さま)を偲(しの)ばせます、萱葺(かやぶき)の屋根

ではありません。

伸上る背戸に、柳が霞んで、ここにも細流(せせらぎ)に山吹の影の映るのが、絵に描いた蛍の光を幻に見るようでありました。

夢にばかり、現(うつつ)にばかり、十幾年。

不思議にここで逢いました——面影は、黒髪に笄(こうがい)して、雪の裲襠(かいどり)した貴夫人のように遥(はるか)に思ったのとは全然(まるで)違いました。黒繻子(くろじゅす)の襟のかかった縞(しま)の小袖に、ちっとすき切れのあるばかり、空色の絹のおなじ襟のかかった筒袖(こいぐち)を、帯も見えないくらい引合せて、細り(ほっそり)と着ていました。

その姿で手をつきました。ああ、うつくしい白い指、結立（ゆいた）ての品のいい円髷（まるまげ）の、情（なさけ）らしい柔順（すなお）な髱（たぼ）の耳朶（みみたぶ）かけて、雪なす項（うなじ）が優しく清らかに俯向（うつむ）いたのです。生意気に杖（ステッキ）を持って立っているのが、目くるめくばかりに思われました。

「私は……関……」

と名を申して、

「蔦屋さんのお嬢さんに、お目にかかりたくて参りました。」

「米は私（わたくし）でございます。」

と顔を上げて、清（すず）しい目で熟（じっ）と視（み）ました。

私の額は汗ばんだ。――あのいつか額に置かれた、手の影ばかり白く映る。

「まあ、関さん。――おとなにおなりなさいました……」

これですもの、可懐（なつかし）さはどんなでしょう。

しかし、ここで私は初恋、片おもい、恋の愚痴（ぐち）を言うのではありません。

……この凄（すご）い吹雪の夜（よ）、不思議な事に出あいました、そのお話をするのであります。

その時は、四畳半（かこい）ではありません。が、炉を切った茶の室（ま）に通されました。

時に、先客が一人ありまして炉の右に居ました。気高いばかり品のいい年とった尼さんです。失礼ながら、この先客は邪魔でした。それがために、いとど拙（つたな）い口の、千の一つも、何にも、ものが言われなかったのであります。

「貴女（あなた）は煙草（たばこ）をあがりますか。」

私はお米さんが、その筒袖（こいぐち）の優しい手で、煙管（きせる）を持つのを視（み）てそう言いました。

お米さんは、控えてちょっと俯向きました。

「何事もわすれ草と申しますな。」

と尼さんが、能の面がものを言うように言いました。

「関さんは、今年三十五におなりですか。」

とお米さんが先へ数えて、私の年を訊ねました。

「三碧のう。」

と尼さんが言いました。

「貴女は？」

「私は一つ上……」

「四緑のう。」

と尼さんがまた言いました。

――略して申すのですが、そこへ案内もなく、ずかずかと入って来て、立状（たちざま）にちょっと私を尻目にかけて、炉の左の座についた一人（にん）があります――山伏か、隠者か、と思う風采（ふうさい）で、ものの鷹揚（おうよう）な、悪く言えば傲慢（ごうまん）な、下手が画（え）に描いた、奥州めぐりの水戸の黄門といった、鼻の隆（たか）い、髯（ひげ）の白い、早や七十ばかりの老人でした。

「これは関さんか。」

と、いきなり言います。私は吃驚（びっくり）しました。

お米さんが、しなよく頷（うなず）きますと、

「左様か。」

と言って、これから滔々（とうとう）と弁じ出した。その弁ずる

のが都会における私ども、なかま、なかまと申して私などは、ものの数でもないのですが、立派な、画の画伯方(せんせいがた)の名を呼んで、片端(かたっぱし)から、奴(やつ)がと苦り、あれめ、と蔑(さげす)み、小僧、と呵々(からから)と笑います。

私は五六尺飛退(とびさが)って叩頭(おじぎ)をしました。

「汽車の時間がございますから。」

お米さんが、送って出ました。花菜の中を半(なかば)の時、

私は香に咽(むせ)んで、涙ぐんだ声して、

「お寂しくおいでなさいましょう。」

と精一杯に言ったのです。

「いいえ、兄が一緒ですから……でも大雪の夜(よ)なぞは、

町から道が絶えますと、ここに私一人きりで、五日も六日も暮しますよ。」

とほろりとしました。

「そのかわり夏は涼しゅうございます。避暑にいらっしゃい……お宿をしますよ。……その時分には、降るように蛍が飛んで、この水には菖蒲（あやめ）が咲きます。」

夜汽車の火の粉が、木の芽峠を蛍に飛んで、窓にはその菖蒲が咲いたのです――夢のようです。……あの老尼は、お米さんの守護神（まもりがみ）――はてな、老人は、――知事の怨霊（おんりょう）ではなかったか。

そんな事まで思いました。

円髷（まるまげ）［＃ルビの「まるまげ」は底本では「まるはげ」］に結って、筒袖（こいぐち）を着た人を、しかし、その二人はかえって、お米さんを秘密の霞に包みました。

三十路（みそじ）を越えても、窶（やつ）れても、今もその美しさ。片田舎の虎杖になぞ世にある人とは思われません。ために、音信（おとずれ）を怠りました。夢に所がきをするようですから。……とは言え、一つは、日に増し、不思議に色の濃くなる炉の右左の人を憚（はばか）ったのであります。

音信して、恩人に礼をいたすのに仔細（しさい）はない筈（はず）。けれども、下世話にさえ言います。慈悲すれば、何とか

する。……で、恩人という、その恩に乗じ、情に附入るような、賤しい、浅ましい、卑劣な、下司な、無礼な思いが、どうしても心を離れないものですから、ひとり、自ら憚られたのでありました。

私は今、そこへ——

五

「ああ、あすこが鎮守だ——」

吹雪の中の、雪道に、白く続いたその宮を、さながら峰に築いたように、高く朦朧と仰ぎました。

「さあ、一息。」

が、その息が吐けません。

真俯向けに行く重い風の中を、背後からスッと軽く襲って、裾、頭をどッと可恐いものが引包むと思うと、ハッとひき息になる時、さっと抜けて、目の前へ真白な大な輪の影が顕れます。とくるくると廻るのです。廻りながら輪を巻いて、巻き巻き巻込めると見ると、たちまち凄じい渦になって、ひゅうと鳴りながら、舞上って飛んで行く。……行くと否や、続いて背後から巻いて来ます。それが次第に激しくなって、六ツ四ツ数えて七ツ八ツ、身体の前後に列を作って、巻いては

飛び、巻いては飛びます。巌（いわ）にも山にも砕けないで、皆北海の荒波の上へ馳（はし）るのです。――もうこの渦がこんなに捲（ま）くようになりましては堪えられません。この渦の湧立（わきた）つ処は、その跡が穴になって、そこから雪の柱、雪の人、雪女、雪坊主、怪しい形がぼッと立ちます。立って倒れるのが、そのまま雪の丘のようになる……それが、右になり、左になり、横に積り、縦に敷きます。その行く処、飛ぶ処へ、人のからだを持って行って、仰向（あおむ）けにも、俯向（うつむか）せにもたたきつけるのです。

――雪難之碑。――峰の尖（とが）ったような、そこの大木の杉の梢（こずえ）を、睫毛（まつげ）にのせて倒れました。私は雪に埋

れて行く……身動きも出来ません。くいしばっても、閉じても、目口に浸む粉雪を、しかし紫陽花の青い花片を吸うように思いました。

――「菖蒲が咲きます。」――

蛍が飛ぶ。

私はお米さんの、清く暖き膚を思いながら、雪にむせんで叫びました。

「魔が妨げる、天狗の業だ――あの、尼さんか、怪しい隠士か。」

大正十（一九二一）年四月

底本：「泉鏡花集成7」ちくま文庫、筑摩書房
　　1995（平成7）年12月4日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十一巻」岩波書店
　　1941（昭和16）年9月30日
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2005年11月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。